なぜ通い続けるのか？
―― ある子育て支援サークルの２つの利用のしかた ――

戸　江　哲　理

1　なぜ子育て支援サークルに通い続けるのか？

子育て支援サークル[1]は、母親たちが知り合って、地域社会へと広がるネットワーク[2]作りの場を提供することをひとつの目的としている。だが６年間子育て支援サークルの調査を続けてきた私の感覚から言えば、子育て支援サークルで出会って深いつきあい[3]を築いていく母親たちは少ない。むしろ圧倒的多数の母親たちは、子育て支援サークルで出会った母親たちとはこの場所に限定したつきあいをしているように見える。

この現象は、何も私が調査している子育て支援サークルに特有の現象ではないようだ。たとえば、横浜市の子育て支援サークル[4]利用者を対象に質問紙調査を実施した大豆生田啓友（2006: 154-5）によると、子どもの一時的な預け先として子育て仲間を選ぶ母親は複数回答が可能なのに10％に満たない。この割合は、夫を選ぶ割合（90％）、自分の親を選ぶ割合（50％）と比べて目立って低い。この結果から大豆生田（2006: 154）は、母親たちがお互いへの気遣いから子どもを預けることを遠慮しているのではないかと推測してい

---

(1) 本稿で子育て支援サークルと呼ぶものは、親どうしが語り合う場を設ける・子どもどうしを遊ばせる・親子で参加できるイベントを企画するといった、子育てサークルが行うような諸々の活動を不特定多数の親に提供する場所・活動を指している。親子が上記活動を円滑に進められるように、子育て支援サークルのスタッフはサポート実践を行い、親子が利用できる場所を確保する。以上から分かるように、本稿が言う子育て支援サークルは一般に子育てひろばと呼ばれるものと重なる。だが、子育てひろばの活動は多様でこの概念の外延も現在のところ明確ではない。したがって本稿が取り上げる対象を子育てひろばと呼んだ場合、不要な誤解を招く危険があると懸念する。ゆえに本稿では子育てひろばのうち、とくに母親たちの自主的なサークル活動から成長を遂げたものを子育て支援サークルと呼んで、本稿が一義的に扱う対象として区画する。

(2) 本稿ではネットワーク・つきあい・つながりという３つの表現をコンテクストに応じて使い分けているが、基本的に同じものを指していると捉えて差し支えない。

(3) 本稿では深いつきあい（つながり）と浅いつきあい（つながり）を区別するが、両者を分ける端的なメルクマールは子育て支援サークル以外の場所でつきあいがあるかどうかという点である。

(4) この子育て支援サークルは、NPO法人として活動する子育てひろばのパイオニアとして著名な「びーのびーの」（NPO法人びーのびーの 2003）である。

る。この見立ては、私が調査から得た実感とも合致する。つまり、子育て支援サークルの狙いと裏腹に、この場所を基点として地域へと広がる緊密なネットワークを張り巡らせていく母親たちは少ないように思えるのだ。

この現状認識に立った場合に不思議なことは、それでも数多くの母親たちが子育て支援サークルを利用し、あまつさえ常連利用者も存在しているという事実である。それでは、彼女たちは何を求めて、何を得ることができるから子育て支援サークルに通い続けているのだろうか。本稿が取り組む問題はここにある。本稿はこの問題を表裏一体となった2つの下位問題へと分解し、順次検討を進める。

第1に、常連利用者の多数派を占めるタイプの母親たちについて検討する。既に述べたように、子育て支援サークルの常連である母親たちの多くは特定の母親たちと仲良くなっていない。逆に言えば、とくに仲の良い相手がいなくても子育て支援サークルに通い続けているということでもある。したがって彼女たちは、他の母親たちと深いつきあいになることの他に、子育て支援サークルを利用することから何かを得ているに違いない。それが何なのかをはじめに探索する。この探索を通じて、母親どうしのネットワーキング拠点という側面とはまた違った子育て支援サークルの顔が浮かび上がるはずである。

第2に、レアケースについての検討である。例外的ではあるが、子育て支援サークルで出会ってグループ化し、子育て支援サークル以外でもつきあっている母親たちもいる。そこで、このつきあいの様態を詳らかにし、このグループのメンバーがとくに仲良くなった理由を解明する。この作業を通じて、子育て支援サークルで出会った母親たちが子育て支援サークル以外へと広がるつながりを築く上で重要なファクターについて、一定の見通しを得ることができるだろう。本稿では上の課題を解明するために、ある子育て支援サークルの常連利用者の母親たちにインタビューして得られたデータを検討する。この検討によって、母親たちにとって当該子育て支援サークルに通い続けることがどんな意味をもっているかが詳らかとなる。このことは子育て支援サークルの側から見た場合、当該子育て支援サークルが制度上の思惑を超えて現にどんな支援を提供し、どんな役割を果たしているかを解明することを意味している。

2 先行研究の検討

社会学の立場から子育て支援サークル（とそれに類する活動）を取り上げた研究は少ない。例外的に、簡単な紹介といえる岡野晶子（2009）、スタッフへのインタビューを実施した松木洋人（2007）、スタッフの利用者への対応をエスノグラフィックに検討した松永

愛子（2005）などがある[5]。だがこれらの研究はどれも利用者である母親に主眼を置いたものではない。このなかにあって、戸江哲理（2008a, 2008b, 2009, 2011）は母親どうしのコミュニケーションについて会話分析の立場から検討し、とくに戸江（2009, 2011: 97-110）では母親どうしが会話を通じて関係を構築・維持・更新するプロセスを分析している。だが戸江（2009, 2011: 97-110）は、母親たちが子育て支援サークルにいて話をしていることを分析上の前提としているから、なぜ母親たちが当該場所に足を運ぶのかという点は後景化している[6]。これに対して本稿はこの部分にスポットライトを当てる。

社会学では子育て支援サークルにかんする研究は少ないが、子ども家庭福祉などもっと実践に近い領域では研究の蓄積も進みつつある（小出 1999; 原田 2002; 福川編 2005; 渡辺編 2006a）。なかでも大豆生田（2006）・渡辺顕一郎編（2006b）は直接本稿に関係する研究として代表的なものである。両研究でも利用者像と利用の効果を掴むことは中心的な課題のひとつとなっており、利用者へのアンケート調査・インタビュー調査を実施している。調査の結果、たとえば大豆生田（2006: 149-51）は上でも言及した横浜市の子育て支援サークル利用者について、30歳代／専業主婦／本人・夫・子ども1人の核家族といった利用者像を報告している。また利用の効果については、大豆生田（2006: 199-200）・渡辺編（2006b: 85）ともに、各種の子育て情報を得るとか子育ての孤独感を和らげるといった面で効果があると報告している。

これらの研究は、広く子育てひろばの研究を行う者・子育てひろばの実践者が参照すべき基本的な知見を提出したものと評価できる。とはいえ関心が高い研究課題を幅広くカバーしているがゆえに、個々の研究課題については今後の研究に対して多くの余地を残しているように思える。本稿の課題に即して言うなら、具体的な利用様態の差異を捕捉する作業は上記の研究では未着手である。だがこの課題を検討することを通じて、利用タイプ

---

[5] 子育て支援サークル・子育てひろばの理念・目的に照らして言えば、家族社会学の育児不安（牧野 1982; 池田 2009）・育児ネットワーク（落合 1989, 1993; 松田 2001, 2008）の議論はこれらの活動に深く関連している（戸江 2011: 28-31）。じっさい、育児不安の研究（牧野 2009: 14）でも育児ネットワークの研究（松田 2008: 174-6）でも、当該活動の意義と期待は述べられているが、現段階では詳しい検討を行った研究に乏しいといえる。

[6] だからと言って、会話分析がこれらの問題を扱えないということではない。たとえば、普段他の母親たちと待ち合わせて利用することが多い母親が親子単独で利用した場合、単独での利用かどうかをめぐってスタッフ・他の利用者と一連のやりとりが生じることがある。また、終了時間を過ぎてやって来た新規の利用者が「子育てが楽になる場所があると聞いて来た」と利用の理由について語ったことがあった（2007年1月19日のフィールドノーツ）。これらのケースでは子育て支援サークルを訪れること自体が相互行為上の問題となっている。また後者のケースでは、対応したスタッフはこの利用者が帰った後で、「時間より早く来る人や遅く来る人は大切にせなな」と言った（2007年1月19日のフィールドノーツ）。つまりスタッフは、利用者が開設時間外にやって来たことから利用の切迫性を推測している。利用者の子育て支援サークルを訪れるタイミングもまた、以後スタッフと利用者がやりとりを進める上でのリソースとなりうることが分かる。

別に見た利用者の子育て支援サークルに対するニーズ（の差異）を把握することが可能となるだろう。このことは、スタッフがよりきめ細かな支援を行う上でも有益な知見となるはずである。

3 調査対象——フィールドとインタビュイー

インタビュイーの母親9人は、大阪府南部の同一子育て支援サークル（以下ではXと呼ぶ）の常連利用者である。インタビュー調査は、2008年7月から12月にかけて計7回、1回につき1時間から2時間程度の要領で実施した。表1はインタビュイーの基本的な情報を整理したものである。なお、私はこの子育て支援サークルで2006年5月から2010年3月まで月平均1.5回のペースで、ビデオカメラを用いた調査と参与観察にもとづく調査を行った。本稿ではこれらの調査で得た情報も適宜参照する。また、必要に応じて別の子育て支援サークルYについても適宜言及する[7]。

この子育て支援サークルXの運営主体は、大阪府南部のN市で活動するNPOである。このNPOは、同市内に4ヶ所のつどいの広場[8]を運営している。これらのなかでもXは、もっとも古くから開設されていた。インタビュイーの母親たちは、他の3ヶ所ではなくXを主に利用していた。Xは、N市内に切り拓かれた大阪府下有数のベッドタウンの一角に居を構えている。大阪市中心部から電車で1時間弱という距離で、近隣住民はサラリーマン世帯が多く、とくに周辺の団地は結婚後の最初の住まいに定めた比較的若い夫婦が目立つ。

Xの利用者数は2010年度で延べ3,723組・8,073人（大人3,723人・子ども4,350人）、利用料は飲み物・お菓子・イベント参加費用などを除いて無料である。次に開設時間だが、平日・土曜日の昼間（10時～16時）に開設している。土曜日も開設しているが、男性つまり父親の利用者は極めて稀である。開設時間内の出入場は基本的に自由だが、午前・午

---

[7] この子育て支援サークルは大阪府北部で活動している。Yの周辺は古くから続く商店街である（この意味でニュータウンの一角に位置するXと対照的である）。利用者はX同様に専業主婦が多いが、近い将来に再就職するプランをもっている人がXの利用者に比べて多いようである。Yの2010年度の利用者数は大人1,199人・子ども1,563人であった。なお、私は2008年9月からYでの調査を続けている。

[8] つどいの広場は2002年に創設された政府事業である。事業の趣旨は、「主に乳幼児（0～3歳）をもつ子育て中の親が気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合うことで、精神的な安心感をもたらし、問題解決への糸口となる機会を提供すること」（厚生労働省 2002: 第2段落）である。この事業を創設した理由について、厚生労働省（2002: 第1段落）は、「少子化」・「家族形態の変化」・「都市化の進展」・「近隣との人間関係の希薄化」が「子育てへの不安や精神的負担感を増大」させ、虐待を生んでいるからだと説明している。この説明から、つどいの広場創設の背景に育児不安・育児ネットワークの知見が控えていると理解できる。つどいの広場は2010年時点で全国1,527ヶ所を数える。

表1　インタビュイーの基本的な情報

名前	年齢[1]	子どもの性別と年齢[1]	職業[2]	幼保利用[3]	実家	夫の職業
A[4]	27歳[5]	息子（4歳）[5]	専業主婦	なし	隣市	会社員
B[4]	28歳[5]	娘（4歳）[5]	専業主婦	なし	他県	会社員
		娘（1歳）[5]	→パート[6]			
C	33歳	娘（3歳）	パート[7]	なし	市内	会社員
D[4]	38歳	息子（7歳）	専業主婦	なし	市内	会社員
		息子（5歳）				
E	30歳代前半	息子（3歳8ヶ月）	専業主婦	なし	市内	会社員
F	30歳代前半	息子（3歳3ヶ月）	専業主婦	なし	隣市	会社員
G	28歳	息子（3歳2ヶ月）	専業主婦	なし	隣市	会社員
			→パート	→保育所		
H	27歳	息子（3歳1ヶ月）	専業主婦	なし	他県	会社員
		娘（7ヶ月）				
I	28歳	息子（2歳6ヶ月）	専業主婦	なし	隣市	会社員

(1) 母親・子どもの年齢はインタビュー時点の年齢
(2) Xを頻繁に利用していた時期の職業
(3) Xを頻繁に利用していた時期の幼稚園・保育所の利用
(4) インタビュー時点では非常勤スタッフ
(5) 数ヶ月単位で不正確な可能性がある
(6) Xの非常勤スタッフ
(7) 自宅で行う作業

後の2部制を取っている。スタッフは基本的に2人が常駐し、母親の話を聞き、子どもの相手をし、母親たちにティータイムの時間を提供する。ティータイムで母親は、他の初対面の母親とテーブルを囲む場合もある。

じっさいスタッフがティータイムを提案する狙いのひとつは、母親たちがリラックスして話をするチャンスを提供することにある。このためスタッフは、母親たちが会話に集中できるように、ティータイムの提案を行うと同時に子どもを一時的に預かることも提案する。写真1は、このティータイムで母親たちが利用するテーブルである。もちろん、母親たちが話し合って知己を得るチャンスはティータイムでダイニングテーブルに着くときに限定されない。Xを利用する母子が多くの時間を過ごす畳のスペース、各種絵本を取り揃えた本棚がある読書室、夏はビニールプールを設置する庭など、母親たちはX内のどんな場所でも他の母親たちと出会い、話し合うことができる。

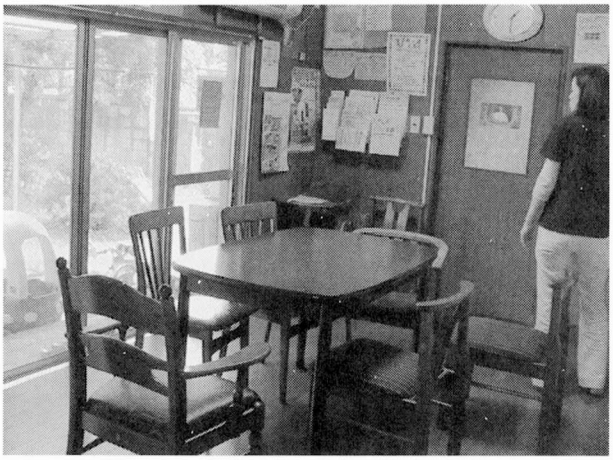

写真１　ティータイムで使用するダイニングテーブル

Xのメインの利用者層は、上で述べた住宅地からやって来る主婦専業の母親たちである。スタッフも正確な情報を把握していないが、私が調査してきた感覚から言えば、利用者の年齢層は20歳代後半から30歳代前半に集中している。だが近年になって20歳前後の若い母親を見かけることも増えた。また、利用者の母親たちは子どもを1人しかもたない母親、つまり人生ではじめての子育てに取り組んでいる母親が多い傾向にある。なお、子どもの年齢は0歳から3歳が圧倒的多数を占める。さらに、比較的短期間で来なくなる利用者が少なくないことも指摘できる。上で述べた団地は新婚夫婦にとって手頃な家賃だが、このことは団地暮らしで資金を貯め、他の住宅地に移り住むプランをもつ夫婦が多いことを意味している。したがってXの利用者は、一定期間の利用回数は多くても長期間定着するのではなく、比較的短期間で来なくなることが見受けられる。このなかにあって本稿が取り上げるインタビュイーたちは、最低でも2年以上の長期に渡って通い続けた常連である。

4　データの性質と分析の手法

インタビュー・データの検討に入る前に、インタビュイーの選定理由・インタビューの実施要領・データ分析の手法などを簡単に説明しておく。上記9人をインタビュイーに選んだ理由は、主として次の2点である。①インタビュイーが皆、Xの常連利用者であったこと。本稿の目的に照らして、インタビュイーは一定期間・一定頻度でこの子育て支援サークルを利用している必要がある。②1節でも述べたように、これらの利用者たちが他の利用者たちとのつきあいかたという面で対照的だったこと。表1のA・B・C・Dが特別に

親しい相手がいない常連利用者、E・F・G・H・Iがグループ化した常連利用者である。さらに付言するなら、グループ化した5人の母親たちが、この子育て支援サークルの常連利用者のなかでも目立って親しい関係を築いていたことにも興味を惹かれた。

インタビューは全てビデオカメラで録画し、録画データは全て20秒から60秒単位で発言内容を整理・コーディングする作業を行った。データ全体を詳しくコーディングした理由は、コーディング作業自体が分析であるという立場（J. Lofland and L. H. Lofland 1995）からである。またR. M. Emerson, R. I. Fretz and L. L. Shaw（1995）からも、被調査者たちの意味づけを重視しながらコーディングを行うという面で示唆を得た[9]。

5 グループ化していない母親たち

5-1 つきあいを限定する常連利用者たち

Aたち4人は、グループ化したEたち5人と同じく常連利用者であった。利用頻度で言うなら、Aは週1･2回、Bは週2回、Dは週2･3回、Cは週3回以上利用していた時期があった。とはいえ、来る頻度が多いことと常連であることは同一視できない。M. A. Katovich and W. A. Reese II (1987: 322) がバーの常連のエスノグラフィックな研究から指摘したように、常連という立場にとって量的な側面以上に質的な側面が重要である。端的に言えば、来た回数以上に当該場面の雰囲気に溶け込んでいることが重要なのである。この点に関連して、彼女たちは他の利用者やスタッフとも一定以上のコミュニケーションを取っていた。たとえばBはXを利用しはじめた頃、Xに溶け込むべく努力した様子を次のように述懐した。

> そう、だから私〔最初の〕1ヶ月か2ヶ月くらい必死やったからね、来るのんに。ここのスタッフの名前を憶え、利用者さんの名前を憶え、もう試練やんね（笑） だから自分の居場所づくりのためって言うと、すごいオーバーなるけど、……自分自身をなじむまでになんかすごくそこは疲れる作業でもある。

スタッフ・他の利用者の名前を憶えることで、Bが（単に何回も足を運んでいるだけでなく）この子育て支援サークルのメンバーになろうと努力していたことが窺える。この作

---

[9] Emerson, Fretz and Shaw（1995=1998: 46）は、フィールドワークを進めるに当たってフィールドにいる人々自身の意味づけを重視するように推奨する。この立場に則るなら、データのコーディング作業はデータの外側から持ち込んだ概念・カテゴリーを用いることを可能な限り避けることが望ましい。なぜなら、その作業によって人々自身が捉えている意味づけを把握し損ない、外部的な別様の物差しでデータを読み込む危険があるからである（Emerson, Fretz and Shaw 1995=1998: 243）。この手法は、母親たち自身がお互いのつきあいをどう捉えているかを解明しようとする本稿の道筋に親和的である。

業は、B自身が「試練」とか「疲れる作業」と表現しているように労力を要するものであった。この結果としてAたちは他の母親・スタッフからXの常連と見なされるようになった。じっさいA・B・Dの3人は後にスタッフから声が掛かって、この子育て支援サークルのスタッフになっている。このリクルートは、Aたちがスタッフから見て気心の知れた存在だったことを端的に物語っている。

だが、常連でありながらAたちは他の母親たちと深くつきあおうとはしなかった。むしろ、他の母親たちとのつきあいをX内部に限定しようとしていた。たとえばAは、Xで知り合った誰とも連絡を取っていなかった。Cも、子育て支援サークルで出会った母親たちと外部でつきあうことはほとんどなく、道で見かけたら挨拶をするくらいの関係だと語った。さらにDも次のように語った。

> 私は、割とサッパリしてるのよ。〔子育て支援サークルで出会った他の母親たちの〕携帯〔電話〕のメール〔アドレス〕も全然知らんとかいうパターン多かったよ。あんまり深入りせえへん。……向こうから聞かん限り、携帯〔電話の番号〕も教えへんしメール〔アドレス〕も言わへんし、「ワァーつきあおう」とかそういうんじゃないねん。

Dの発言からは、他の母親と連絡先を交換するチャンスがなかったから外部でのつきあいがないのではなく、むしろ本人が踏み込んだつきあいへと進展することを敢えて避けていたことが窺える。このことは、他の母親から要求があってはじめて連絡先を教えるというスタンス、さらに「深入り」という表現などが如実に物語っている。Aたち4人は他の母親たちと親しくすることに積極的ではなかったのである。したがってAたちがXに通い続けていた理由は、他の母親と親しくなることとは別のところに求める必要がある。その理由として、つきあいをXに限定しても一定のサポートが得られること、むしろつきあいを限定することが利得となること、この2点を指摘できる。順次検討する。

5-2 限定的なつきあいから得られる育児サポート

つきあいをXに限定すると、つながりは必然的に浅くなる。だがXを利用している限り、他の母親とのつながりが浅くても一定の育児にかんするサポートを得ることが可能である。たとえば、子育てにかんする情報を他の母親から入手できる。代表的なものは、保育所・幼稚園・病院・子育て支援といった地域の子育て関連施設についての情報・評判である[10]。3歳に満たない子どもをもつ母親たちは、これらの情報・評判に対して高い関心

---

[10] したがって、このタイプの母親たちにとってXが提供する浅いつながりは、ネットワーク分析の

をもっている。

また、子育て支援サークルで入手できる子育て情報は、眼前にいる他の親子から得られる情報という点で、マスメディアなどから得られる情報と大きく異なっている。だがこれらの情報は、何も相手と親しくないと得られない類の情報ばかりではない。極端に言えば、他の親子の様子を観察しているだけでも情報が入ってくる。たとえばAは、はじめての子育てだったから子どもの叱りかたが分からなかったが、Xに来て「先輩がた」が叱っている様子を見て叱りかたが分かったと語った。

さらに、もう少し踏み込んでお互いの子育ての悩みを語り合う場合でも、母親たちは微妙な距離感を維持しながら話を進めようとすることが少なくない。たとえば、他の母親の子育ての悩みに対して提案や助言をする場合に、直接的な表現を用いるのではなく、「自分だったらこうする」といったもう少し控えめな表現を用いることがある（戸江 2008b, 2011: 83-96）。このことは裏を返せば、他の母親と特段に深いつきあいでなくても子育てにかんするヒントを得られることを意味している。

これらの例からも分かるように、他の親子と同じ場所で過ごせることは浅いつきあいから諸々のサポートを得る基盤となっている。子どもたちも同じ部屋にいると、母親どうしが親しいかどうかと関係なく、いつの間にかいっしょに遊んでいることも少なくない。この環境は、自分自身は他の母親と親しくつきあいたくないが、子どもの遊び相手は必要だと思っている母親たちにとって、たいへん望ましい環境である。また子どもどうしが遊びはじめると、普段自宅では子どもが自分から離れない母親も子どもと離れる時間を少し得ることができる。こうして自分の子どもが他の子どもと遊ぶ様子を一歩離れた場所から観察できることは、母親が子どもを客観的に捉える上で重要だとされる（森下 1997: 117-8）。同時に、この時間は母親どうしが子どもからの介入を受けることなく話し合える貴重な時間ともなる。

当然ながら、他の母親たちとの話し合いの意義は子育ての有益な情報交換に尽きるものではない。母親どうしのこれらの会話にピアカウンセリング・ピアサポート的な意義を見出す議論も少なくない（大日向 2005: 100; 大豆生田 2006: 163-4, 210; 渡辺 2006: 79-80; 清水 2008: 112）。たとえばBは次のように語った。

> 人が話をしているのを聞くのんでも、なんかちょっと違うことない？……まあ言うたら自分の1年後、2年後の姿の子どもらの苦労を聞けるから。「ああ、そんなんもあってんねやあ」とか……

言葉を借用するなら「橋渡し機能（bridging function）」（Granovetter 1973）に近い役割を担っているとも表現できる。

そんな話を聞くのんは別に私は好きなほうやから。だから別にそれを聞いてて、それでも気分転換にもなったし。

Bにとって、自分の子どもより少し上の年齢の子どもの母親から苦労話を聞くことは、「気分転換」する上でも有益だった様子が窺える。他の母親たちとの会話は、リフレッシュ効果があるという意味で感情的なサポートの一種という側面をもっている。

以上の検討から、浅いつながりのなかでも一定程度の情報的・手段的・感情的サポートを得られる様子が浮かび上がった。だが言うまでもなく、これらのサポートは確かに浅いつながりでも獲得できるが、深いつながりからも得ることができる。むしろ深いつながりでは一層手厚いサポートを得られるようにも思える。では、なぜ敢えてAたちは深いつながりを避けるのか。この問題を解くには、母親どうしのつながりのネガティブな側面に目を向ける必要がある。

5-3 深いつながりを避けながら浅いつながりを維持する

つきあいを制限する母親たちは、子育て支援サークルを通じた他の母親たちとのつきあいを負担に思っていることが少なくなかった。Aがこの点をもっとも率直に語った。AがXを利用しはじめた頃、Xの他の利用者たちは30歳代が多く、当時20歳代中盤だった彼女から他の母親たちは怖く見えた。心理的な負担を抱えながらも敢えてXに通い続けた理由について、Aは次のように語った。

はじめは本当に年上ばっかりだったから、なんかくつろぎに来るというより、勉強に来るというか。何やろ挑戦に挑むではないけど、「ここで耐えられへんかったら、この子育てていかれへんわ」とか（笑）……頑張って来てる感じでしたね。うんうん。

AがXを利用していた理由は、母親に子育てからの息抜きとつながり作りの場を提供するという子育て支援サークルの理念から少し離れたところにあった。つまりAは、Xで過ごす時間がリフレッシュどころか負担となることを重々承知で通っていた。Aが用いた「挑戦」という表現がこのことを端的に物語っている。そして、この負担は他の母親と出会うことで生じる負担である。Aは、子育てを続ける上で避けて通れない母親どうしのつきあいを「勉強」するためにXに通っていた。このことを踏まえると、AがXで知り合った他の母親たちとX以外の場所でつきあおうとしないことも容易に首肯できる。

だがこのことは、Aが他の母親とのつきあいを一切望んでいないということではない。むしろ一定のつきあいが必要だと思っているが、積極的にこのつきあいを深めたいと思っ

ていないといえる。この浅いつきあいを維持したいというニーズをもっている場合、Xのような子育て支援サークルはたいへん便利だといえる。

Aはこの点を公園と比べて語った。Aの自宅近くに大きな公園がある。この公園でAは、11時頃からあつまっている母親グループに何回か遭遇した。だが、会った日に話しても次に会ったときに憶えていると限らないし、次に会えるとも限らないという問題があった。また、公園であつまっている母親たちと浅い状態のつきあいを維持することが容易ではないという問題もあった。Aは、公園の母親たちがグループ化している印象を抱き、「まず入りにくいんですよ（笑）」と語った。新参者のAから見て、強固なメンバーシップが既に出来上がっているように感じ、次第に足が遠ざかった様子が窺える[11]。

これに対してXの場合は、利用を続ける限り浅いつきあいの状態でつながりを維持し続けることが可能である。たとえば2人の母親がXで出会い、話が合ったとする。この2人がXで再会する上で、お互いの連絡先を交換しておくことは必須ではない。なぜなら、自分がいつも何曜日の何時頃Xに来ているかという限定的な自分の「アクセス情報」(Gardner 1988）を伝えるだけで十分だからだ。

さらに、Xを利用する頻度が多い常連利用者の場合、相手からアクセス情報を得ずとも、自分で相手が来る曜日・時間帯を調べ上げることもできる。たとえばAは、同年代のBを気に入ってBがXに来る日を密かに「リサーチ」し、Bが来る日に合わせてXを利用していたと語った。なおBは、Aが自分の利用日を調べていたことをインタビュー時点まで知らなかったが、このことからAがBと微妙に距離を置いてつきあおうとしていた様子が窺える（さらに踏み込んだ関係にしたいなら、次に会う約束を交わすという選択肢もあったはずである)。

子育て支援サークルは、浅いつながりを維持する負担を減殺するという面でも、このタイプのつながりを維持したい母親たちにとって便利である。Dは、浅いつながりを自力で維持する場合とXを利用する場合を比べながら次のように語った。

> だからXがなかったら、もっときついんちゃうかなあとか思う。……もうそうなってくると、もうちょっとこう、……そういうコミュニケーションしっかり取って、いろんな家こう渡り歩くみたいなコミュニケーションを。……いうようなやりかたで、自助努力で頑張るしかないやろうなあとか。うん。……うちらの場合、ここがあったからなあ。

---

[11] Bもこの公園で母親たちがあつまっていることを知っていたが、Xがあったから敢えて公園で友達を作ろうとは思わなかったと語った。この発言から、Bも浅いつながりを維持する上で公園よりもXのほうが便利だと思っていたことが分かる。

はじめに、「渡り歩く」という表現に注目したい。この表現からは、特定の母親と親しくつきあうのではなく、色々な母親（「いろんな家」）と浅くつきあいたいというDの嗜好を窺い知ることができる。つまりこの表現でDは、浅いつながりのネットワーキングを言い表している。Dは、この作業を自力（「自助努力」）で進めることが負担（「きつい」・「頑張る」）だと捉えている。そして、この自力でのネットワーキングの負担とXを利用したつながりの維持の負担を比べ、後者で負担が少なかったと捉えている。Dにとって、Xは自力で浅いつきあいを維持する負担を軽くするという意義をもっていた。

以上から分かるように、Aたちは他の母親たちとの深いつながりを求めていないが、同時に浅いつながりは必要としている。だが正にこの浅いつながりを維持することが、通常少なからぬ困難・負担を伴っている。子育て支援サークルXは、この困難・負担を和らげるという意味でAたちにとって望ましいものであった。長期に渡ってAたちが常連としてXに通い続けた大きな理由は、ここに求めることができる。

6　グループ化した母親たち

6-1　つきあいの進展と様態

Xの常連利用者の多くは、Aたちと同様にXで知り合った他の母親たちと浅いつながりを維持しているように見える。これに対して、Eたち5人の仲の良さは突出していた。EたちがXを利用する主たる理由は、端的に言って自分たちどうしで会うことである。お互いが会うことの意義について、「友達がおらへんかったら、楽しくないなあ」（G）とか「ぜったい嫌」（H）と自分たちの関係が友達であることを暗示しながら、つきあいの意義を強調した。Eたちの関係が昵懇であることは、彼女たちが一部の例外を除いてお互いを「名前＋ちゃん」で呼び合っていることからも窺える。この呼称はお互いのつきあいが友達関係に准ずるものであることを物語っている。なお、Xの利用者は「苗字＋さん」で呼び合うことが普通で、Eたちのような親密な呼称を用いる利用者は他に見当たらない。Eたち5人は仲良しグループといえるような親密な関係を築いている。

逆にグループ化した結果としてEたちは、メンバーが集合しているときにメンバー以外の利用者と話したり、メンバーの子ども以外と自分の子どもを遊ばせたりすることが非常に少ない。場合によっては、通常利用者たちがあつまっている畳のスペースから離れ、読書室をグループのメンバーだけで使用していることもあった。さらに、ティータイムや昼

食の時間などでもメンバーが離れることはない[12]。彼女たちにとってXに通うことは、グループの他のメンバーと会うことと同義なのである。

他の常連利用者・スタッフたちも、Eたちがグループ化していると捉えている。ベテランのスタッフはEたちくらい仲の良い利用者は知らないと語った。一例を挙げると、ある日H親子だけがXに姿を現したことがあった。すると、その場にいたスタッフたちがHに、今日はH親子だけで来たのかと質問した（2007年7月19日のフィールドノーツ）。このエピソードは、スタッフがHの登場にEたち他のメンバーの不在を見ている、つまりEたちをグループと捉えていることを物語っている。

Eたちの関係は急速に進展した（表2参照）。彼女たちのつきあいは、2006年3月・4月頃にF・G・J（後に他県へ転居）の3人がXで出会ったところから始まった。3人はすぐに意気投合し、連絡先を交換、以後お互いの家を訪問し合う関係になった。少なくとも当時のXでは、母親たちがこれほど早く連絡先を交換することは珍しかった。F・G・Jの3人が出会った数ヶ月後の7月にHがFと知り合い、G・Jとも交流を深めていった。さらに数ヶ月後の11月にEがH・Jと知り合った。但し、当初は子どもが小さかったこともあってXを利用することは少なく、むしろ子どもたちが1歳を過ぎた頃から頻繁にXを利用するようになった。中心メンバーといえるFがパートに出はじめた一時期活動が停滞したが、インタビュー当時は週1回土曜日の午前にXであつまることが常態化し、午後からはメンバー全員でX近くの公園に移動してさらに1･2時間を過ごすことが慣例となっていた。この時点でEたちのXの利用期間は通算2年6ヶ月近くに達していた。

Eたちのつきあいのターニングポイントは、2007年4月か5月に子ども連れで隣の市にあるレジャー施設を訪れたことと、同年8月に母親たちだけで難波まで吉本新喜劇を見に行ったことである。前者の意義は、X以外の場所で会ったということに留まらない。彼女たちは既にお互いの自宅を訪問し合っていた。だがこのレジャー施設は行楽用の牧場で、隣の市の不便な場所にあるから母親たちが自家用車を運転して出掛ける必要があった。自宅を行き来する場合に比べ、明らかに負担が大きい。

後者の重要性も明らかだ。この遠出（N市から難波は電車で1時間程度）は、他県への転居が決まっていたJの送別会といった側面があった。この遠出で注目すべきは、子どもを連れずに母親たちだけで出掛けている点である。「J親子の」ではなく「Jの」送別会と

---

[12] このことは業務終了後のスタッフ・ミーティングの議題に上ることもある。スタッフは、特定の利用者たちがグループ化することで他の利用者（とくに新規の利用者）が居づらくなることを懸念しているからである。現実問題として、ある常連利用者はグループ化した利用者がいる時間帯の利用を控えているとスタッフに語ったという（2009年9月26日のフィールドノーツ）。

表2　グループ化した母親たちのつきあいの年表

時期	出来事（備考）
2006年3月／4月[1]	F・G・JがXで出会う（その場で連絡先を交換）
2006年4月／5月[1]	F・G・Jなどで定期的にお互いの家にあつまりはじめる
2006年7月	FとHがXで出会う
2006年11月	EがG・JとXで出会う
2006年～2007年の冬季	E・F・G・H・JでよくXの「1歳タイム」にあつまるようになる
2007年1月～3月	土曜日にあつまりはじめる
2007年2月	GとIが近所のスーパーマーケットで再会する
2007年4月	IがXに来はじめる
2007年4月／5月[1]	E・F・G・H・Jで子どもを連れて隣市のレジャー施設を訪れる（夫を連れずに）
2007年8月	F・G・I・Jで吉本新喜劇を見に行く（子どもを連れずに）
2007年9月	Jが夫の仕事の都合で他県へ転居
2007年11月	Gがパートに出る

[1] どちらの月か明確ではない

して子どもを連れずに母親たちだけで遠出していることから、彼女たちのつながりが非常に深い様子が窺える。子育て支援サークルという場所で子どもを介して出会いながらも、彼女たちは既に「自分の」友達という関係を築いていたといえる。では、彼女たちがこれほどまで親しくなった理由は何に求めることができるのだろうか。

6-2　仲良くなった理由

結論から提示するなら、彼女たちが特別に仲良くなった主要な理由は、①子どもの月齢が近かったこと、②子どもの性別が同じだったこと、③中心となる社交的なメンバーがいたこと、以上の3点に整理できる。①から順に説明を進める。

①Eたちのグループの子どもたちは月齢が近い。遅れてメンバーとなったIの子どもを除くと、他の4人の子どもの月齢は最大で7ヶ月しか離れていない（表1参照）。じっさいIを除く他の4人の母親は、Xの「1歳タイム」という1歳児限定の時間帯を通じてつながりを深めていった（表2参照）[13]。Eたちは、子どもにとって月齢の近い子どもと遊ぶことは特別に楽しいことだと思っていた。この理由として、たとえばCは子どもどうしの月齢が近いと興味をもつことやすることが同じだからだと語った。

だが子どもの月齢が近いことは子どもが楽しいだけでなく、母親自身にとっても利益が

[13] 同じ年齢層の子ども限定の日に知り合った母親どうしが親しくなることは珍しくない。XではEたち以外にもグループ化した母親たちがいるし（但し、子どもの生年はEたちの子どもの生年よりも後）、Yでも0歳児限定の日に定期的にあつまることを重ね、連れ立って近所で昼食を取る関係に進展した母親たちもいる（2009年12月17日のフィールドノーツ）。

ある。一般的に言って、母親どうしが親しくなるとお互いの子どもの様子を間近で遠慮なく観察できるようになる。また、母親たちは自分の子どもと月齢が近い子どもの成長・発達に対する関心が高い。したがって、月齢が近い子どもの母親と仲良くなると月齢が近い子どもの成長・発達という気になる情報を豊富に入手できるという長所がある。さらに、月齢が近い子どもの母親なら子育ての話が合いやすく、愚痴も理解してもらいやすいということもある。つまり月齢が近い母親どうしは、子どもについて情報交換し、愚痴を言い合える貴重な相手となる可能性がある。子どもの月齢が近いことは、子ども・母親の両面からメンバーのつきあいを後押ししたといえる。

②Eたちのグループの子どもたちは全員男の子である(Hの第2子は女の子だが、グループのつきあいがはじまった頃は長男しかいなかった)。月齢が近かったことと同様に、性別が同じことも子どもたちの遊びと関係している。Eたちは、自分たちの子どもの月齢でも既に男女で遊びかたが違うと感じていた。たとえばGとHは、女の子の場合はテーブルに落ち着いてお絵描きや折り紙で遊ぶことができるが、男の子の場合はこれらの遊びにすぐに飽きて別の場所に行って走り回りはじめると語った。このことから母親たちは、男の子どうしで遊ぶほうが楽しいと思っていた。

だがこれも月齢の差が小さいことと同じく、男の子どうしで遊ぶことも母親たちにメリットがある。端的に言って、男の子どうしで遊んでいると母親たちも気楽なのだ。男の子だけで遊ぶことと女の子も交えて遊ぶ場合の差は、子どもどうしのトラブルが生じた場合に顕在化する。男の子が女の子の遊びを邪魔した場合、相手が女の子で自分の子どもが男の子だからということもあって、相手と相手の母親に一生懸命謝らないといけないと母親たちは思っている。これに対して、男の子どうしで何かトラブルが生じた場合は「お互い様」で済ませられる。だから女の子の母親に比べて、男の子の母親とはつきあいやすいのである。

以上から分かるように、子どもたちが同性であることも、子どもの都合と母親の都合の両面から母親たちのつきあいを促進していた。母親の都合が関連してくる背景として、母親たちが子どもどうしのトラブルを子どもだけで完結しないものと捉えていることや子どもの性別によってトラブル時の対応が異なる（べきだ）と思っていることがあった。母親たちは、3歳に満たない子どもにジェンダー差を見出し、このジェンダー的な見かたが母親たちのつきあいを進展・抑制する基盤のひとつとなっていることが窺える。

③Eたちのグループの形成・維持に当たって、Gが果たした役割は大きい。G以外のメンバー全員がこの点を再三強調した。たとえばIは、自分たちのグループを「Gさんチーム」と呼んだくらいである。また、私はF・Iのインタビューのなかで彼女たちに手伝っても

らい、グループのソシオグラムを描く作業を行った（他のメンバーの意見も採用し、最終的に出来上がったものが図1のソシオグラムである）。この作業を進めるなかで、私は何気なくGを図の中心に置いた。これを見たFは「Gさんを中心に書くのは正解です」と言って笑った。このエピソードは、他のメンバーがGをグループの中心人物だと見なしていること端的に物語っている。

Eたちのグループは、バラバラだった小さなユニット3つ（図1では破線で囲んだ部分）から形成された。㋑F・G・H・Jの4人のユニット。F・G・Jの3人はXで出会って意気投合、その場で連絡先を交換した。Hは遅れてこのユニットのメンバーになった。㋺E・Gのペア。2007年の夏には、連れ立って週3回というハイペースでXに来ていた。最後に、㋩G・Iのペア。高校の同級生だったが、偶然に近所のスーパーマーケットで再会、GがXに来るように誘い、つきあいがはじまった。つまり、3つのユニット全部に入っている唯一の人物がGであった。Gは、これらのユニットが単独のグループへと統合していく上で正にハブとしての役割を担った[14]。Eはこの様子を「ちっちゃい輪がおっきな輪になった」と表現した。

Gがハブとなることで、他のメンバーはお互いとつきあいをはじめる負担を減らすことができた。具体的に言うと、Gは他のメンバーたちに対し、彼女たちがお互いを知っていると主張し、同じグループへと引き込んでいった。つまり他のメンバーは、自力で他のユニットのメンバーに声を掛けたということではない。つながりを作る負担という面から見た場合、G以外のメンバーにとって前者が後者に比べて負担が少ないことは明らかだ。F

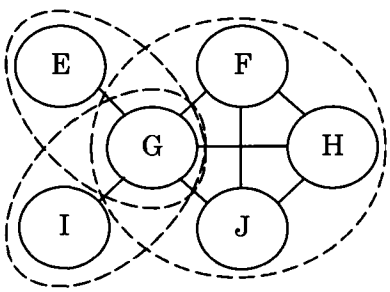

図1　グループを構成した小ユニット

[14] 再度ネットワーク分析の言葉を借用するなら、Gは「媒介中心性（centrality of betweenness）」（Freeman 1977）がもっとも大きいメンバーだったと言い換えることができる。

はIとの出会いについて、「気がついたらいたんよ」、「たぶんGさんを介して自然に、紹介された訳でもなく、いつの間にかいたみたいな」と語った。FがIとのつながりを作る上で特段の労力を費やしていないこと、Gがこの作業を肩代わりしたことが窺える。

Xには毎日数多くの母親たちが訪れる。したがってXで面識を得る母親は多いし、共通の知人を通じて明示的・暗示的にお互いに自己紹介することも少なくない。だが、面識・知己を得ることは親しくなることと同じではない。むしろ知己を得た上で、親しくなるチャンスを生かして関係を進展させる必要がある（戸江 2009, 2011: 97-110）。この作業は通常母親本人の負担をともなうものだが、Gがハブとなることで他のメンバーたちはこの負担を減殺できたのである。

以上、Eたちが特別に仲良くなった理由について3点から見てきた。一見すると、子どもの月齢が近いこと・子どもの性別が同じことは子どもの都合、最後に説明した社交的なメンバーの存在が母親の都合だと思える。だが詳しく見た場合、前2者についても母親自身の都合が混入していた。この知見は、既に6-1節で確認したEたちが子どもを介したつきあいではなく本人自身の友達づきあいになっていることと重なる。つまり、彼女たちは自分の楽しみを犠牲にして、子どものために子育て支援サークルへと通っているとはいえない。むしろ、自分の友達づきあいに子どもを巻き込んでいくしたたかさを垣間見ることができる。この彼女たちの姿は、「子ども中心主義」といった悲壮感漂う母親のイメージとは相容れないものである。

6-3 深いつながりから得ているもの

以上の議論からも分かるように、同じ常連利用者でもEたちのグループのつきあいは、Aたち多数派の常連利用者のつきあいかたと多くの点で対照的である。Aたちは、他の利用者と浅いつながりを維持しながら、情報的サポート（子育ての情報など）・感情的サポート（愚痴の言い合いなど）・実質的サポート（子どもどうしを遊ばせる時間など）を得ていた。これに対して、Eたちはメンバー以外の利用者と基本的につながりをもつことなく、メンバーどうしの関係を深化させていく[15]。

つながりの種類が異なることから、つながりから得られるサポートも大きく違っている。サポートという面から見た場合、Eたちのつながりはグループのメンバー間の強力な感情

---

[15] 浅いつながりを維持する母親たちにとってXのつながりが橋渡しの役割を果たしているとするなら、グループ化した母親たちにとってXで得たつながりは「内部の結束を強化する（bonding）」（Putnam 2000=2006: 19-21）役割を果たしているといえる。この点については、第84回日本社会学会大会（2011年9月18日）での平本毅氏のコメントから示唆を得た。

的サポートによって特徴づけられる。感情的サポートが母親どうしで話し合うことから生じる点では、Eたちのグループも Aたち普通の常連利用者と同じといえる。だがEたちの場合、話し合う具体的な内容が重要だとは捉えていなかった。会話の内容について、Hは「ほんとに世間話」と言い、Gは「テレビの話もするし、こんなヘンな人がおってとか訳分からん話もする」と言った。これらの発言から、具体的な話の内容は重要ではなく、子育て関連の話である必要もないことが分かる。むしろこのメンバーで話し合うこと自体が、彼女たちにとって感情的なサポートだといえる。

Eたちのつきあいは既に、子どもを介した母親どうしのつきあいではなく、本人たちにとっての友達づきあいとなっている。たとえばFは、グループのメンバーとのつきあいと自宅近くに住む同年齢の子どもをもつ母親たちとのつきあいの違いについて、次のように説明した。

> なんか、ね、今の、こう、あつまりっていうか、仲のいい5人？は、なんか友達って感じで。自分の友達っていう感じで、近所の人は子どもを介した友達、おつきあい、おつきあい。

両者に対する表現の修正が興味深い。Fは、自分たちのグループについて「友達」と表現した後で「自分の友達」へと表現を修正している。この修正は、グループのメンバーがF自身の友達であることを目立たせ、同時に子どもが理由となったつきあいではないことも分かるようにしている。対照的に近所の母親（「近所の人」）については、一旦「子どもを介した友達」と表現した後で「おつきあい」に表現を修正している。Fは「友達」から「おつきあい」への修正で、近所の母親たちとの親しさのレベルを引き下げ、グループのメンバーとの差を目立たせている。この発言は、グループのメンバーとのつきあいと他の母親たちとのつきあいとの質的な相違を端的に表している。

Eたちのつきあいがお互いにとって負担となっていない理由も、グループのメンバーとのつきあいが母親自身の友達づきあいとなっている点に求めることができる。子どもを介した母親どうしのつきあいの場合は気の合わない相手もいるから気を遣うが、母親どうしが友達である場合は気を遣う必要がない。たとえばG・Hは、お互いに面と向かって、相手の子どもを預かることは嫌だと語った。また、彼女たちのつきあいが母親どうしとしてのつきあいではなく自分自身にとっての友達づきあいであることから、このつきあいから得られるサポートも子育て関連に留まらない総合的な生活の満足、敢えて言えばウェルビーイングに寄与するものだといえる。

7 子育て支援サークルの２つの利用のしかた

本稿の問いは、なぜ常連利用者たちは子育て支援サークルに通い続けるのかというものであった。この問いに対して以上の検討は、子育て支援サークルから満足を得る利用のしかたが少なくとも２つあることを明らかにした。両者はともに母親どうしのつながりを中心的な要素としていたが、つながりかたという面では対照的であった。

Ａたち４人の場合、他の母親たちとのつながりを敢えてＸに限定することで、つながりが深くなって負担へと転化することを避けていた。浅いつながりで満足できる理由は、浅いつながりであっても彼女たちが求める様々なサポートを得られたからだった。たとえば、地域の子育て情報を得、他の母親と子育てについて話し合い、自分の子どもを他の子どもと遊ばせることができた。

Ｅたち５人のグループの場合はむしろ逆に、つながりを徹底的に深めることでこの課題が生じる前提を崩していた。つまり、お互いの関係を本人自身の友達づきあいへと深化させ、母親どうしのつきあいとは質的に異なるものとしていた。既に母親役割と子どもを必要としなくなった彼女たちのつながりからは、子育て関連のサポートというよりもむしろ、直接彼女たち本人に感情的サポートが注ぎ込まれていた。彼女たちの手にしたサポートは、子育てと直接関係しない母親自身のウェルビーイングを高めるものだったのである。

どちらの利用のしかたも、Ｘで出会った他の母親たちとのつながりが重要な意味をもっている点で同じだが、Ｘでのつながりに何を求めているかという点で両者は決定的な違いをもっている。この違いを生む要素を検討するに当たっては、母親たちがＸで手に入れたつながりを彼女たちがもっているつながり全体のなかに位置づけて把握する必要があるだろう。この点については今後の課題としたい。

子育て支援サークルＸの立場から見た場合、Ｘは自身の思惑と必ずしも合致しないところで、２タイプの対照的な常連利用者の併存を許容しているといえる。この弾力的な対応が可能である点に、Ｘ（と延いてはＸが代表する子育て支援サークル）の子育て支援施策におけるユニークな意義を見出すことができる。もちろん、本稿が析出した２タイプは子育て支援サークルの利用のしかたの一部に過ぎない[16]。だが、利用者が子育て支援サー

---

[16] 本稿で取り上げた２タイプ以外に、他の利用者たちとのつきあいよりもむしろ、顔なじみのスタッフとのつきあいを楽しみに通い続ける常連利用者もいるかもしれない。Ｙでは、利用者とスタッフが共通の趣味（ジャニーズ）について話に花が咲く（2009年５月15日のフィールドノーツ）とか、深刻な悩み（酒量が極めて多くなっていること）について個人的に話をする（2009年９月28日のフィールドノーツ）といったことがある。ＹはＸに比べると利用者数が少ないために、スタッフと利用者の距離が縮まりやすいことが関係しているように思える。

クルにどんなつながりを求めているかを見極めることで、スタッフ側が一層利用者のニーズに見合った支援を実施することが可能になると思える。

とはいえ、本稿が取り上げた2タイプの利用の併存は微妙なバランスの上に成り立っている。たとえば常連利用者がグループ化した結果、他の利用者たちが会話に入ることが難しくなって孤立に陥るとか、グループ化した常連利用者が利用する時間帯にXへ来ることを控えるといった問題が生じることがある。Xのスタッフはこれらの問題について懸念し、様々な対策を講じている[17]。この問題はXに限定的なものではなく、多くの子育て支援サークルでスタッフ（と利用者）が直面している問題だと推測できる[18]。引き続き調査と検討が必要である。

付記

インタビュー調査に協力して頂いた子育て支援サークルの利用者の皆様に厚くお礼を申し上げる。また、インタビュー時に部屋を提供して頂いたスタッフの皆様にも謝意を表する。本稿は3年に渡って様々な場で報告し、その都度草稿に修正を加えてきたものである。主な報告としては、第16回日本子ども社会学会大会での報告「乳幼児をもつ母親どうしのつながり——子育て支援サークルでの関係性の生成と維持」(2009年7月4日・中国学園大学)、京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の2010年度研究成果報告会での報告「つながりとしがらみ——乳幼児をもつ母親どうしの交友」(2011年2月22日・京都大学)、第84回日本社会学会大会での報告「つながりとしがらみ——子育てひろばを通じた母親どうしのつきあい」(2011年9月18日・関西大学）などである。これらの報告に対してコメントして頂いた皆様に感謝の意を表したい。本稿はまた、上で述べた京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」のワーキングペーパーを書き改めたものでもある。さらに、本稿を仕上げる段階で『京都社会学年報』のコメンテーターのかたがたから頂いたコメントも有益であった。とくに木下衆氏の示唆に富んだコメントに深く感謝する。但し、本稿の誤謬の一切は戸江がその責めを負うものであることを明記する。最後に、本稿は2010年度の京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」次世代研究の助成と2011年度の日本学術振興会からの科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部であることを申し添える。

参考文献

Emerson, R. M., R. I. Fretz, and L. L. Shaw, 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, Chicago: The University of Chicago Press. (= 1998, 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳『方法としてのフィー

---

[17] 以前Xでは常連利用者のグループが一日中留まり続け、スタッフは他の利用者が居心地良く過ごす雰囲気を損なっていると感じたことがあった。この出来事が午前・午後の2部制へと移行したきっかけのひとつとなっている。また日々の実践でも、たとえばティータイムのテーブルをグループ化した母親たち数人とグループのメンバーではない母親が囲んだ場合、スタッフ自身もテーブルに着くことでグループに入っていない母親が取り残されないように配慮するなどしている。注12も参照。なお、上で述べた常連利用者のグループは本稿で取り上げたEたちのグループとは別である。Eたちのグループのメンバーはこの点についてある程度自覚的で、周囲に迷惑を掛けているかもしれないという懸念・心配をスタッフにもインタビュー時にも語っていた。

[18] 同時に、子育て支援の現場がこの問題をどう受け止めて対処するかをつぶさに観察することは、現場に密着して人々の実践を見つめ続けるエスノメソドロジーの課題ともいえよう。

ルドノート——現地取材から物語作成まで』新曜社.）
Freeman, L. C., 1977, "A Set of Measures of Centrality Based on Betweenness," *Sociometry*, 40（1）: 35-41.
福川須美編, 2005,『非営利・協同組合ネットワークの子育て支援のあり方に関する国際比較——カナダと日本をみる』2003-2004 年度科学研究費補助金成果報告書, 駒沢女子短期大学.
Gardner, C. B., 1988, "Access Information: Public Lies and Private Peril," *Social Problems*, 35（4）: 384-97.
Granovetter, M. S., 1973, "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78: 1360-80.（= 2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 123-54.）
原田正文, 2002,『子育て支援と NPO——親を運転席に！ 支援職は助手席に！』朱鷺書房.
池田隆英, 2009,「日本の『育児不安』に関する計量的研究の動向と課題」『精華女子短大研究紀要』35: 25-52.
Katovich, M. A., and W. A. Reese II, 1987, "The Regular: Full-Time Identities and Memberships in an Urban Bar," *Journal of Contemporary Ethnography*, 16（3）: 308-43.
小出まみ, 1999,『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房.
厚生労働省, 2002,「つどいの広場事業」, 厚生労働省ホームページ, (2011 年 9 月 1 日取得 , http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/04/h0408-2.html#5).
Lofland, J., and L. H. Lofland, 1995, *Analysing Social Settings: A Guide to Qualitative Observation and Analysis*, 3rd ed., Belmont: Wadsworth Publishing.（= 1997, 進藤雄三・宝月誠訳『社会状況の分析——質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣.）
NPO 法人びーのびーの, 2003,『おやこの広場 びーのびーの』ミネルヴァ書房.
牧野カツコ, 1982,「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』3: 34-5
————, 2009,「子育ての場という家族幻想——近代家族における子育て機能の衰退」『家族社会学研究』21（1）: 7-16.
松田茂樹, 2001,「育児ネットワークの構造と母親の Well-Being」『社会学評論』52（1）: 33-49.
————, 2008,『何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房.
松木洋人, 2007,「子育てを支援することのジレンマとその回避技法——支援提供者の活動における『限定性』をめぐって」『家族社会学研究』19（1）: 18-29.
松永愛子, 2005,「地域子育て支援センターの役割について——状況の多重性の中での『居場所』創出の場として」『保育学研究』43（2）: 52-64.
森下久美子, 1997,「親と〈0123 吉祥寺〉——支え合う子育て」柏木惠子・森下久美子編『子育て広場武蔵野市立 0123 吉祥寺——地域子育て支援への挑戦』ミネルヴァ書房, 113-32.
落合恵美子, 1989,「育児援助と育児ネットワーク」『家族研究』兵庫県家庭問題研究所, 1: 109-33.
————, 1993,「家族の社会的ネットワークと人口学的世代——60 年代と 80 年代の比較から」蓮見音彦・奥田道大編『21 世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会, 101-30.
岡野晶子, 2009,「子ども家庭支援センター——地域の子育て支援事業」白井千晶・岡野晶子『子育て支援制度と現場——よりよい支援への社会学的考察』新泉社, 177-91.
大豆生田啓友, 2006,『支え合い, 育ち合いの子育て支援——保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』関東学院大学出版会.
大日向雅美, 2005,『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』岩波書店.
Putnam, R. D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon and Schuster.（= 2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.）
清水美知子, 2008,「育ち合いの子育て支援活動——親子ひろば『はらっぱ』を事例として」『関西国際大学研究紀要』9: 109-25.
戸江哲理, 2008a,「糸口質問連鎖」『社会言語科学』10（2）: 135-45.
————, 2008b,「乳幼児をもつ母親の悩みの分かち合いと『先輩ママ』のアドヴァイス——ある『つどいの広場』の会話分析」『子ども社会研究』14: 59-74.
————, 2009,「乳幼児をもつ母親どうしの関係性のやりくり——子育て支援サークルにおける会話の分析から」『フォーラム現代社会学』8: 120-34.
————, 2011,「子育て支援サークルの会話分析」京都大学大学院文学研究科 2011 年度博士論文.

渡辺顕一郎, 2006,「地域子育て支援の拠点としての『ひろば』——利用者に対する調査結果から」渡辺顕一郎編『地域で子育て——地域全体で子育て家庭を支えるために』川島書店,75-90.
————編, 2006a,『拠点型地域子育て支援におけるプログラム活動のあり方に関する研究』2005年度児童関連サービス調査研究等事業報告書, 子ども未来財団.
————編, 2006b,『地域で子育て——地域全体で子育て家庭を支えるために』川島書店.

（とえ　てつり・日本学術振興会特別研究員 PD ／奈良女子大学）

"Why Do They Go?": Two Ways of Using a Child-Raising "Circle"

Tetsuri TOE

In this article, I investigate the reason some mothers frequently go to a child-raising "circle" (social organization) and the manner in which they use it. To answer these questions, I interviewed nine mothers who regularly go to a child-raising circle. There are two types of mothers. One type attends the child-raising circle to get information about child rearing from other mothers and interacts with them for a while. However, they hesitate to befriend the other mothers. They do not feel the need to befriend the other mothers in order to garner their support or get information from them. Rather, they only need to *be there* to watch and talk with the other mothers and their children, who are also present. In contrast to the first type, the second type of mothers goes to the child-raising circle and become friends with the other mothers. To be more precise, they go there to maintain and further their relationships with some of the other mothers who have children in the same age group and of the same sex. Because of this, they become friends quickly. In addition, a member of them makes them to get closer to each other powerfully. They regularly go to meetings in order to meet and talk with the other members. More importantly, they meet with each other members *outside of the child-raising circle without their sons*. It means that their friendship is beneficial not only for the sons but also for the mothers themselves. For the mothers, meeting with other members of the group enhances their well-being. We can say that the child-raising circle is flexible enough to accommodate both contrasting ways of its use. This flexibility exhibits the uniqueness of child-raising circles amidst the many child-rearing support services in Japan.